

 Japan Spinal Cord Foundation	SSKU 特定非営利活動法人 日本せきずい基金ニュース	〔季刊〕 No.91 2021-12
--	---------------------------------------	---------------------------------

事務局からのお知らせ

Walk Again 2021 in 沖縄 受付開始!

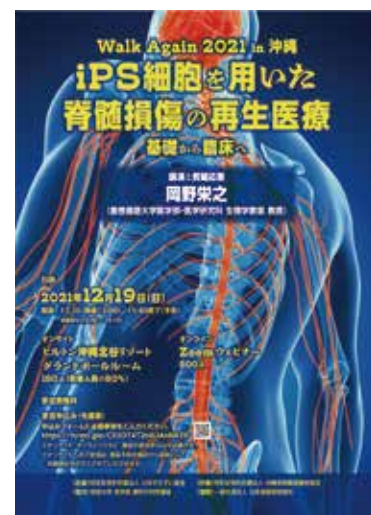
iPS細胞を用いた損傷脊髄の再生

2021年12月19日(日)、神経再生研究の最新の成果を皆さんと分かち合うイベント「Walk Again」を開催します。約2年ぶりとなる本年のWalk Againは、講師として岡野栄之先生(慶應義塾大学医学部生理学教室教授)を沖縄にお招きします。講演と質疑応答のすべてがZoomウェビナーによって全国のどこからでもライブでご視聴いただけます。

「Walk Again」は、神経再生研究の最新の成果をフロントランナーたちから誰でも直接聴くことのできる場として、日本せきずい基金が発足当初から毎年秋に実施してきたイベントです。昨年はCOVID-19の全国的な感染拡大の影響で実施できなかったため、沖縄での開催を計画しはじめて3年めにやっと実現の運びとなりました。琉球大学の西田康太郎教授と沖縄県脊髄損傷者協会の協力を得ての開催です。今回は、亜急性期での臨床試験が始まったiPS細胞にフォーカスします。

講師を務める岡野栄之先生は1980年代から神経再生の研究に取り組み、1991年にショウジョウバエでmusashi遺伝子を発見。その後RNA結合タンパク質Musashiを標的にヒト成人の脳に内在性の神経幹細胞があり、大人の中枢神経系(脳と脊髄)も再生可能であることを明らかにしました。以降、脳と同じ中枢神経である脊髄の再生を目

指して研究を続け、ES細胞(胚性幹細胞)から神経幹細胞を誘導し、脊髄損傷のマウモセットで脊髄再生に成功しました。京都大学の山中伸弥教授が2006年にiPS細胞を樹立した後は、ES細胞で確立した研究成果をベースに、iPS細胞による脊髄再生研究に、整形外科の中村雅也先生とともに尽力してきました。



「From Rare To Common」、つまり「希少難病の克服があらゆる病気の克服につながる」という考え方をモットーに研究に取り組む岡野先生にとって、脊髄損傷はまさにその代表的な疾患であり、重要なテーマです。というのも、1年間に国内で発生する脊髄損傷が約6,000症例で急性期・亜急性期は「Rare」(希少な)であり、その後慢性期に移行した患者が約12万人とも15万人ともいわれるほどの「Common」(一般的な)な疾患であるからです。

基礎研究と臨床での治療の間には、かつて「死の谷」と呼ばれたほどの大きなギャップがありましたが、脊髄損傷におけるiPS細胞の研究ではそれをどのように乗り越えてきたのか——講演会では、90分間という時間を存分に使って、脊髄損傷当事者やご家族など一般の皆さんにもわかりやすく説明していただきます。

当日は講演の後、休憩をはさんで質疑応答の時間を30分間設けます。Zoomウェビナーでの参加でも質問を受け付けます。(→p.8につづく)

目次

事務局からのお知らせ

Walk Again 2021 in 沖縄受付開始!

iPS細胞を用いた損傷脊髄の再生 p.1

再生医療研究情報

LOTUSの遺伝子導入でiPS細胞による治療効果を改善

／合成ナノファイバーで後肢完全麻痺のマウスが歩行回復

／幹細胞治療の現状に対する提言: 患者を守るために p.2~p.3

医療情報

排泄障害や性機能障害を理解するために p.4

活動報告

ISCoSに参加して／アジア太平洋地域の患者団体が連帯へ p.5

ドリームキャッチャー

宮野秀樹「Life Recovery 私にできることは、あなたにもできること」 .. p.7

事務局からのお知らせ

「Walk Again 2021 in 沖縄」へのご参加について

／ご支援どうもありがとうございます。 p.8

LOTUSの遺伝子導入でiPS細胞による治療効果を改善

岡野栄之(慶應義塾大学生理学教室教授)、中村雅也(同整形外科教室教授)、竹居光太郎(横浜市立大学生命医科学研究科教授)らの共同研究により、LOTUSをヒトiPS細胞由来の神経幹/前駆細胞に遺伝子導入することで、脊髄損傷に対する移植細胞による運動機能回復効果が向上することがわかった。

LOTUSは、神経細胞上に存在するNgR1と結合し、そのリガンドであるNogo、MAG、OMgp、BLys、CSPGsといった軸索再生阻害因子の受容体結合を阻害し、神経細胞を促進するタンパク質。損傷脊髄に対する有効性はわかっていたものの製剤化が困難で投与方法が課題であった。

今回発表されたのはLOTUSの遺伝子をレンチウイルスを用いてヒトiPS細胞由来神経幹/前駆細胞に導入するという方法で、遺伝子を導入した細胞をマウスの脊髄損傷モデルに移植し対照群と比較した。マウスに移植したのは損傷後9日目でヒトでいえば亜急性期にあたる。

結果は、軸索伸張が促進し、アポトーシス(細胞死)が抑制され、神経栄養因子の発現が増加した。また、移植細胞の生着率が上がり、脊髄内での神経線維の頭尾側への伸長が向上した。運動機能の回復に重要なセロトニン神経の繊維が増加したと報告された。(図)

iPS細胞由来神経幹/前駆細胞移植においては、先般、慢性期不全損傷に対する医師主導治験を2023年中に開始する計画が明らかにされた(弊誌no.90)。10月24日には、石川県脊髄損傷者協会創立50周年記念大会で中村雅也教授が「私たちが目指す脊髄再生医療」と題する

講演をし、慢性期完全損傷に対する治療戦略を語った。それによれば、ゼラチンを配合したコラーゲンスポンジに神経栄養因子を分泌させる作用のあるHGF(肝細胞増殖因子)をしみこませて脊髄の空洞部分に設置し、HGFの徐放によって脊髄再生に有利な環境を整えたうえで細胞移植をし、リハビリテーションを実施するというもの。すでにマウスで実験をおこない、損傷後42日目(ヒトでいう慢性期)にHGFを徐放するスキャフォールドを損傷部に設置、その7日後に脊髄の神経に分化しやすい脊髄型iPS細胞由来神経幹/前駆細胞を移植したところ、運動機能評価(BBBスコア、満点21点)が0点から6点まで上がったという。

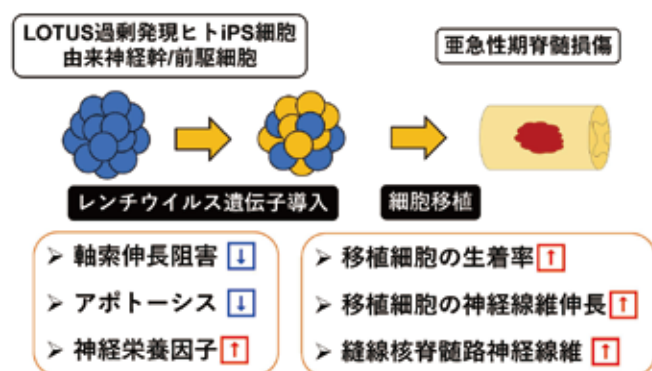
●参考文献

・慶應義塾大学医学部プレスリリース

<https://www.keio.ac.jp/ja/press-releases/2021/10/15/28-83169/>

・原論文 'Stem Cell Reports'誌ウェブ版

<https://doi.org/10.1016/j.stemcr.2021.09.006>



慶應義塾大学プレスリリースより引用

合成ナノファイバーで後肢完全麻痺のマウスが歩行回復

サミュエル・スタップ(米国・ノースウェスタン大学教授)らの研究チームは、合成ナノファイバーを単回投与することによって完全損傷マウスが歩行を回復したと科学雑誌「Science」に報告した。

「ガーディアン」紙によれば、これはもともと脊髄にある環境を模して意図的につくられた分子がもとになっており、細胞を修復し再生するきっかけとなる信号を送る。合成ナノファイバーをスキャフォールド(足場)にするアイデアはこれまでもあったが、ペプチド配列を変異させることにより分子の動きが強化され、シグナル伝達が活性化したことによって今回のマウスによる実験で大きな改善がみられた。同チームはこのデータをもってすぐにもFDA

(米国食品医薬品局)に承認を申請し、2年以内に実際の患者で治験をおこないたい考えだ。

用いられているのは超分子ポリマーと呼ばれる新しい材料である。これはゆるく結合した構造単位から成り、動き回ったり振動したりして、絶えず動いている細胞受容体を見つけて通信できる。

かつては細胞外マトリクスは不活性な足場にすぎないとみなされていた。身体の中の組織にもある非細胞成分だからだ。しかし近年は、こうした細胞外マトリクスが身体の修復プロセスで複雑な役割を果たしているという生化学的・生体力学的なエビデンスが集まってきている。

サミュエル・スタップの研究チームがつくったテトラペ

プチドによる合成ナノファイバーは、細胞外マトリクスを再現したものである。

スタップ教授は、「このポリマーは水に溶解液体の注射として投与することができるが、生体組織に接触するとすぐにゲルに変化し損傷部位に留まる。約2～3週間にわたって、投与したポリマーが細胞に修復の合図を送る」と言う。

マウスは脊髄損傷から24時間後にこれを投与され、3～4週間のうちに歩行を回復した。切断された軸索の伸展と、物理的に修復の障壁となる瘢痕組織の減少、血管の新生、そして運動ニューロンの生存も確認された。

投与したポリマーは12週間以内に細胞の栄養因子へ

と生分解されて消滅する。スタップ教授は、この治療法が、細胞を使わず、電気や侵襲的な装置も用いず、遺伝子も使わないという点でこれまで試みられてきた治療法に比べてリスクが低い可能性を指摘。また、比較的単純な分子であるためさまざまな機能を置き換えやすいことにも大きな可能性を見出し期待している。

●参考文献

・原論文 'Science'誌ウェブ版

<https://www.science.org/doi/10.1126/science.abh3602>

・'Guardian'紙記事:2021年11月11日付

<https://www.theguardian.com/science/2021/nov/11/>

[therapy-used-in-mice-may-treatment-of-spinal-cord-injuries-say-scientists](https://www.theguardian.com/science/2021/nov/11/therapy-used-in-mice-may-treatment-of-spinal-cord-injuries-say-scientists)

幹細胞治療の現状に対する提言：患者を守るために

InterAcademy Partnership (IAP:日本学術会議も加盟している国際学術団体)のヨーロッパ、アジア、オセアニア、南米、アフリカの18か国の研究グループは連名で、「Stem Cell Reports」ウェブ版に7月29日付で、再生医療、とりわけ幹細胞を用いた研究と治療のあり方について「包括性と多様性：幹細胞の課題と可能性に関する国際的な視点の統合」と題する提言を発表した。

再生医療は、組織の再生、修復、再構築を目的とし、幹細胞や遺伝子など用いておこなうヘルスケアの新しい学際的アプローチといえる。

IAPはグローバルで幹細胞の可能性と課題を検討。しかし、エビデンスがほとんどない治療法を規制外で提供する悪意ある民間クリニックと、科学的根拠が不十分なうちに規制当局が承認を出してしまうことの両方によって引き起こされる問題に対する懸念が高まっているとし、世界各国から専門家を招集し、この問題に関するイニシアチブをとるため調査・研究をおこなった。

この研究は、患者を守りつつ、研究と革新をサポートするにはどうしたらいいかという視点でおこなわれた。

安全性と有効性のエビデンスの許容レベルを確かめるため、動物を対象とする前臨床試験、それに続く承認された臨床試験の必要性、それからデータ収集の透明性が確保できるモニタリング手順によって堅牢な科学的基盤が必要であることが説明されている。また、規制当局の許認可、医薬品へのアクセス、さらに患者・政策立案者・一般市民の関わり方について、国際的な基準を設定する必要があるとしている。

4か月後の11月11日、同じ「Stem Cell Reports」誌ウェブ版にアメリカ国内の幹細胞ビジネスについての調査報告が発表された。この報告によれば、アメリカではFDAの

承認なしに何百もの企業が幹細胞ベースのサービスを提供している。このうち59社について、そのウェブサイトでは販売目的に示されている「エビデンス」を分類。こうした企業が、ランダム化臨床試験のようなゴールドスタンダードな科学的根拠に基づく医療的介入サービスをおこなっていることは稀で、逆に「あいまいなエビデンス」を利用していることが多いことを明らかにした。「あいまいなエビデンス」にも科学的・医学的根拠があるように表記されているが、その解釈は状況により大きく異なる。

この調査結果は、患者がどう解釈し選択するか、その選択の結果何が起るかは患者自身の責任になるということを示している。規制当局や学会などがエビデンスの評価を患者自身が下すための情報提供などをおこなっているが、特定のエビデンスタイプの（無効な）有効性に焦点を当てても、現実のビジネスにおいては幹細胞ベースの治療の需要がなくなる可能性は低いことに注意すべきと警告している。

日本でもここ3年ほどの間に民間であまりエビデンスのない幹細胞ビジネスが拡大しつつある。前出IAPの提言には日本からも阿久津英憲医師（国立成育医療研究センター）が参画。他国の研究者らから承認システムについての疑義が上がった幹細胞治療の早期承認問題も含め、まさに当事国として患者を守る方策について真剣な議論が必要だ。

●参考文献

・Inclusivity and diversity: Integrating international perspectives on stem cell challenges and potential

<https://doi.org/10.1016/j.stemcr.2021.07.003>

・Weighing up the evidence used by direct-to-consumer stem cell businesses

<https://doi.org/10.1016/j.stemcr.2021.10.007>

排泄障害や性機能障害を理解するために

10月に発行された「脊椎脊髄ジャーナル」の特集は「脊髄病変と排泄・性機能障害」だった。多くの脊髄損傷者が排泄障害や性機能障害に悩まされながら、羞恥心などのためにふだんかかりつけにしている医師にも具体的な相談ができずにいる。また、医療者側も脊髄障害に伴う排泄・性機能障害の診療経験に乏しいことが多く、新しい知見に基づいた的確な治療ができないでいる。こうした現状が一日も早く変わることを願い、内容をいくつか紹介したい。詳細は文末を参照のうえ、ぜひ本誌にあたってほしい。

●関戸哲利「脊髄障害における下部尿路機能障害の評価法のポイント」：脊髄損傷者の下部尿路機能障害についての評価方法と診断と治療のアルゴリズム、アウトカムの設定の仕方など2019年版のガイドラインに基づいて説明。

●渡邊水樹ほか「腰椎変性病変による下部尿路症状」：下部尿路症状と過活動膀胱の評価や治療について、腰椎変性病変の術前・術後の症例データを用いて考察。

●兼松龍ほか「圧迫性脊髄病変と排便障害」：おもに馬尾症候群と頸椎症性脊髄症について、術前・術後のデータから排便障害との関係性を考察。

●乃美昌司「脊髄障害による神経因性大腸機能障害に対する経肛門的洗腸療法」：経肛門的洗腸療法(TAI)の適応、洗腸手順を図を用いて解説。メリットなどについて多施設共同研究の結果を引用して考察。

●高橋良輔「脊髄障害と性機能障害」：脊髄障害によって男性と女性それぞれにどんな性機能障害が起こるか、現在どのような治療がおこなわれているかを解説。

●小堀善友ほか「脊髄損傷による射精障害患者に対する妊孕性温存」：20歳代の男性に脊髄損傷が多く発生することから、脊髄損傷患者の性機能は生殖機能にも直結する問題であることを提起。精子採取の方法と精子の質に関する考察、挙児を目的とした評価と治療のアルゴリズム等について解説。

以上、「脊椎脊髄ジャーナル」vol.34 no.4、2021年10月5日発行、三輪書店(本体2,500円+税)より。

AD

ISCoS (国際脊髄学会)に参加して

第60回ISCoS(国際脊髄学会)年次総会が9月29日から10月2日にかけて完全オンラインで開催された。日本せきずい基金からは1名が参加。世界各国の研究者やさまざまな分野の専門家による講演やワークショップ、ポスター発表などを視聴した。

ルース・マーシャル会長は開会の辞で「知識と経験を共有」することの価値に言及。ISCoSには医師のほかPT、OTといった療法士はもちろん、福祉の専門家や患者が運営にも参加して大きな役割を担っている。設立に尽力したルートヴィヒ・グットマン医師が生涯にわたり医学的アプローチにとどまらない取り組みを進めたことを引き継ぎ発展し、現在参加国は欧米以外にもアジア、南米、アフリカにも及ぶ。60周年というダイヤモンド・アニバーサリーにあたり、今回はグットマン記念講演として脊髄減圧術を創始したチャールズ・テイター医師(トロント大学脳神経外科教授)の発表があった。4日間通して基調講演は5つ、シンポジウムや口演など数多くのプログラムが組まれ、テーマは再生医療、臨床研究の方法論、疼痛、QOL、評価法、ヘルスケアシステム、ビッグデータ、転落予防、患者とのコミュニケーションなどなど非常に多岐にわたった。

ISCoS ならではのといえば、当事者がパネラーになりピア

カウンセリングをテーマにおこなわれたミーティングであった(写真)。まずパネラーが自国で実施した脊髄損傷者の現状調査の結果とそれを踏まえてどのようなサポートをしているか、課題は何かといった発表をおこない、ディスカッションや視聴者からの質問に回答しながら進行。活発なやりとりがあり、セッションは90分に及んだ。

日本でも脊髄損傷者はもっと積極的に研究者らとコミュニケーションをとり、調査・研究・政策立案などに協同で取り組む態勢をつくる必要があるが、そのためには脊髄損傷をめぐる医療・福祉システムなどについて広い視野をもって学ぶ必要もあると痛感した。(事務局まとめ)



Day 1の当事者ミーティングの様子。左下はインド、右下は南アフリカのピアカウンセラー。

アジア太平洋地域の患者団体が連帯へ

韓国脊髄損傷協会(KSCIA)は、アジア太平洋地域における脊髄損傷者の状況を調査し情報共有のための国際会議を開いた。日本せきずい基金は、会議に先立っておこなわれた国別の調査レポートの作成に協力した。10月2日にオンラインでおこなわれた国際会議では、台湾、バングラデシュ、スリランカ、韓国からの事例報告に続き、KSCIAによる基調報告とディスカッションがあった。

調査に参加したのは11か国。国によってかなり違いがあるものの、解決すべき共通の問題も明らかになった。参加団体連名で採択する共同声明は「独立と連帯の決議」と題し、脊髄損傷者が地域で充実した自立生活を送るために不可欠のこととして次の6項目を挙げている。

- 1) 脊髄損傷者の人権と尊厳にかんがみ、その実現機会と利便性を確保するために、生活の全分野をカバーする包括的なリハビリテーションプログラムを確立する必要がある。
- 2) 脊髄損傷に対応する医療資源や医療費を拡充し医療のキャパシティを強化する必要がある。
- 3) 地域社会への移行リハビリテーションが必要であり、そ

- れには日常生活動作トレーニング、福祉機器の提供、心理カウンセリング、職業リハビリテーションが含まれる。
- 4) 脊髄損傷者の自立と社会貢献のためには、地域社会においても健康、教育、移動、雇用に関するサービスが継続的に提供される必要がある。
 - 5) 脊髄損傷者は、リハビリテーションシステムの改善や自立生活の確保のために協力する必要がある、これにより自ら仕事を起こし行政を変えていくことができる。
 - 6) アジア太平洋地域の脊髄損傷団体は、共通の課題にとともに取り組むために相互協力を強化する必要がある。



台湾脊髄損傷基金から発表をおこなったJoshua Xuさんは自身も脊髄損傷当事者

Life Recovery

私にできることは、あなたにもできること

みやの ひでき
宮野 秀樹



はじめまして、宮野秀樹と申します。NPO法人ぼしぶるで重度障害者の自立支援および権利擁護活動に従事しております。全国頸髄損傷者連絡会の事務局長や全国脊髄損傷者連合会・兵庫県支部の事務局長も務めております。

1992年12月、交通事故を起こしました。シートベルトを着用していなかったため車外に放り出され、助手席側のフロントガラスを突き破った際に頸髄4番を損傷しました。当時21歳。私は首から下の機能をすべて失いました。

受傷後しばらくは頸髄損傷という障害の情報がまったく得られず、生きるための見通しも立たず、不安と苛立ちまみれの最悪の病院生活でした。

半年経ったころ、同じ頸髄4番の損傷者に出会ったことをきっかけに、私の人生が再出発の錨を上げました。彼がロールモデルとなり、ぼんやりとこの先のロードマップが見えてきました。目標こそ明確ではありませんでしたが、「どうやって生きていくべきか」というイメージを持てるようになりました。そのうちに、「あなたにできることは、私にもできる」と考えるようになりました。そしてそれを実践することで、あらゆることが実現していきました。

兵庫県の片田舎でのひとり暮らしに始まり、そこを拠点に全国へ出向き、あらゆる分野の事業に参画しました。気がつけば、2つのNPO法人を設立し、頸髄損傷者の自立支援を全国組織でおこなうまでになりました。多くの重度障害者のひとり暮らしや人工呼吸器ユーザーの社会参加実現に携わりました。海外にも活動範囲を拡げ、訪れた国は8か国にのぼります（海外旅行は16回！）。

このように書くと、私が特別な重度障害者で私にしかできないことをやっているように思われるかもしれませんが。しかし私はあくまでも、先達が切り拓いてきた道を単に歩いただけであり、「私にできること＝あなたにもできること」だと思っています。じゃ、私にしかできないことは何かあるのか……と考えてみたりしても、やはり私ができることは、誰にでもできることとしか思えません。

かつて、「重度の障害を負い、どん底に落ちたとしても、そこから這い上がり、その経験を人に伝えて、多くの仲間の人生を回復する役に立てたなら、障害はプラスでしかないはず」と語ってくれた重度障害の大先輩がいます。感銘を受けました。「障害をプラスに変える」者はそう多くはないだろう、私がそうなら、と考えてやっています。

親元を離れられず、外出もままならない障害者を数多く見てきました。法律や制度に翻弄され介護保障が満足に得られず、安定しない仲間や自身の自立生活に怒りを感じてきました。重度障害者が「自立と社会参加」を当たり前にするためには、やはり自らが動く必要があります。自分がロールモデルになることを意識して、「呼ばれたら行く」「どこにでも行く」「とにかく外へ出る」を徹底的に実践し、ひとり暮らしの仲間を増やす活動が続けてきました。

そしてひとつの答えを見つけました。「介護があれば生きていける」。とてもシンプルな考えです。制度や環境は後からでも作ることができる。場所も「ここしかダメ」などという理由はありません。ただし、四肢麻痺の体ゆえに他者の介護がなければ生きられません。選択の自由と主体性の尊重が保障された介護さえあればどこでも生きていけるはずです。

確かめるために、昨年、住み慣れた兵庫県から沖縄県へ移住しました。自治体の制度や医療体制などの違いに最初は戸惑いましたが、コロナ禍の1年半で自分らしい生活をつくり上げることができたことから、私が見つけた答えは間違っていないことを実感しています。

私がいまやりたいのは「ネクスト&リンク」——一次なる可能性の創出と、その可能性をつなげること。誰か沖縄の地で、人の役に立つ事業をいっしょにやりたいという重度障害者はいませんか？ 私が見失って学んだ「人生は素晴らしく、そして楽しい」をともに体現してくれる仲間を求めています。

事務局からのお知らせ

「Walk Again 2021 in 沖縄」 へのご参加について

弊誌トップページでお知らせしましたとおり、今年のWalk Againは沖縄で開催しますが、県外の方でもZoomウェビナーでライブ視聴ができます。90分間の講演の後、15分間の休憩をはさんで質疑応答の時間を30分間設けます。Zoomウェビナーでご参加の方もオンラインで質問をご入力いただくことで、現地参加者と同じように岡野先生に質問を出すことができます。

当日ご参加の皆さまは事前に参加登録をしてください。なお、ウェビナーの記録は、後日、YouTubeの日本せきずい基金のチャンネルで公開する予定です。

右に、実施概要と参加申込み方法を記します。弊誌に同封するチラシも合わせてご参照ください。

皆さまのご参加を心よりお待ちしております。

●Walk Again 2021 in 沖縄

日時 2021年12月19日(日)

13:30開演(現地開場13:00)、15:45終了※休憩あり(15:00～15:15)

〈オンサイト〉ヒルトン沖縄北谷リゾート グランドボールルーム

定員150人(収容人員の50%)

〈オンライン〉Zoomウェビナー 定員500人

講師 岡野栄之先生(慶應義塾大学医学部生理学教室教授)

演題 「iPS細胞を用いた脊髄損傷の再生医療～基礎から臨床へ」

参加費 無料

参加申込み方法

※オンサイト(現地)へのご参加は原則として沖縄県内在住者とさせていただきます。

※オンサイト、オンラインどちらも事前の参加申込みが必要です。

オンサイトご参加の皆さまにはご案内状を郵送します。

ZoomウェビナーのURLは開催前日までに登録のメールアドレスへお送りします。

※参加申込みフォームに必要事項をご入力ください。

Walk Again 2021の参加申込みはこちらから→

<https://forms.gle/C55DT4T2n8UAnNR29>



理事会からのお知らせ

ご支援どうもありがとうございます。

2020年の春以降、世界中がCOVID-19に翻弄され、時間の流れ方が大きく変わりました。変わった中でもそれぞれが今あるところで大切にしたいことは何かを問い、おこなってきたことと思います。この1年、日本せきずい基金へのご支援の流れがやむことはありませんでした。皆さまにとって「大切なこと」の一つとして当基金が存在していたことに誇りを感じると同時に、私たちもまた、ご支援くださる皆さまを大切に思っていることをここにお伝えしたいと思います。いただいたご寄付は、活動を続けていくための大きな支えとなっています。

郵送で「日本せきずい基金ニュース」をお手元にお届

けている方には郵便局の払込票が同封されています。ゆうちょ銀行のATMでこの用紙を使うと、ご支援にかかる手数料のご負担なしにご寄付いただくことができます。冊子代と送料は当基金の負担でお送りしておりますので、この払込票は購読料をお支払いいただくためのものではありません。あくまでも、任意のご寄付の際にご利用いただくためのものです。ご購読の開始／中止は下記フォームにていつでも受付けています。

新規ご購読の申込み、登録情報の変更・ご購読の中止は
こちらから→

<https://forms.gle/LvEEizdSYwK9zftRA>



We Ask You

日本せきずい基金の活動は
皆様の任意のカンパで支えられています

● 寄付の受付口座

郵便振替 記号 00140-2 番号 63307

銀行振込 みずほ銀行 多摩支店 普通1197435

楽天銀行 サンバ支店 普通7001247

口座名義はいずれも「ニホンセキズイキキン」です。

発行人 障害者団体定期刊行物協会

〒157-0072 東京都世田谷区祖師谷3-1-17
ヴェルドゥーラ祖師谷102

編集人 特定非営利活動法人 日本せきずい基金・事務局

〒152-0023 東京都目黒区八雲3-10-3-104

TEL 03-6421-1683 FAX 03-6421-1693

E-mail jscf@jscf.org HP <http://www.jscf.org/index.html>

*この会報は日本せきずい基金のホームページから、無償でダウンロードできます。 頒価 100円

★資料頒布が不要な方は事務局までお知らせください。